

池

ここでは何でもが可能のやうに思はれる。しかし危険をはらんでゐるので、かへつて何でもがひかへ日のやうに見える。落葉は底にまだ茶色の光を見せてゐるし、折れ枝は所々に池の面に身を横たへてゐる。鶴の姿勢が遠くで、横に動いたり、立止つたり、首をのぼしたりしてゐる――声もたてない。

彼はわざとここを選んだわけではないが、この池のほとりで結婚について重大な会話を老婦人ととり交はした。

「ここは僕の好きな場所です」

「こんな静かな所でお話出来るなんて……」

彼は老婦人の娘さんをもらへる事になつた。一時、感動で目がうるんだ。二人ともだまつてゐた。

氷りたる池の面少し高まりぬ

笹鳴やよみがへらざる池の面